

## 講演会及び研究集会の記録

## 第9回(平成22年度)弘前大学FDワークショップ

(21世紀教育センター)

21世紀教育センターの主催による第9回FDワークショップが、青森ロイヤルホテルを会場に、6月19日・20日の1泊2日で開催されました。このワークショップでは、昨年度に引き続き「単位制度の実質化を図るための能動的学習の実践～ラーニング・ポートフォリオの活用～」をテーマにした合宿研修の形式でした。参加者は、21世紀教育科目を担当する各学部の教員や「助教」以上で就任5年未満の教員(他大学教員を含む)26名と各学部の学生10名を加え、学務部スタッフ及び21世紀教育センター関係者を合わせて50名となりました。阿闍羅山からの眺望を期待していましたが、生憎の曇り空でしたので、逆に研修に集中できたのではないのでしょうか。

今年度のワークショップは、ラーニング・ポートフォリオの導入を視野に入れ、単位制度の実質化を図るために能動的学習の実践をどのように進めれば良いか、学生の視点を反映させるために、学生参加型とし、教員と学生との相互交流を深めながら、効果的な授業シラバスの作成を目指すという内容でした。

記念写真の撮影を終え、そのまま会場に移動し、神田理事の挨拶からワークショップが始まりました。『菊と刀』を知らない学生が多いことに驚いたという事例を通して、学生の資質の変化や学力のバラツキが目立つなど大学教育に対する現状と課題について指摘がありました。その後、5つのミニレクチャートなどを挟みながら、5つのグループに分かれて、それぞれにシラバスの作成作業を行いました。各グループの成果についてパワーポイントを使用した全体発表と質疑応答を3回行いました。

ミニレクチャー 大高副センター長の「21世紀教育のFD活動」では、21世紀教育センターにおけるFD活動の概要と学生アンケート結果の紹介をはじめとして、大学教育における21世紀教育の位置づけとその役割、21世紀教育を担当する教員の役割と課題、全学部の学生を相手にする点を意識する必要性などについて指摘されました。また、所属学部や専門領域が異なる教員集団で展開するFD活動では、学部や専門領域の利害を超えた新たな視点の必要性、教員同士が気軽にアイデアを利用し相談できるような機会の設定や情報提供の体制の整備等を行い、多様な専門とスキルを持った人材が集まっている教員集団の特徴を活かした連携の必要性を指摘していました。

土持前高等教育研究開発室長の「FDの動向:ファカルティ・デベロップメント(FD)からエデュケーショナル・デベロップメント(ED)への移行」「学習目標 中央教育審議会『答申』と単位制度の実質化」「学習方略 中央教育審議会『答申』と授業シラバス」と「評価 ラーニング・ポートフォリオと評価基準」のミニレクチャー及び初任者研修のための「ティーチング・フィロソフィー(授業哲学)と教育者総覧」の講義がありました。我が国におけるFD義務化の背景やEDの先進国であるカナダの現状紹介を通し、授業改善は学生のためであり、学生を取りまく教育環境全体の改善・向上に向けられるべきであるというEDへと移行する意義が説かれました。また、単位制度の形骸化の責任は大学側や教員にあり、従来の教授法を抜本的に改める必要性があり、講義形式から学生を主体とした能動的学習形態への移行が強く求められていることを指摘していました。そのためには、学習目標の設定、学習方略と評価が重要であると強調されました。

研修初日の最終プログラムでは、話題提供として「学生から見た『学ぶ』とは何か ラーニング・ポートフォリオを書いてみて」と題して、実践した6名の学生による感想発表と資料の回覧もあり、ラーニング・ポートフォリオを具体的にイメージすることができました。

シラバス作成と成果 5～6名の教員と2名の学生とで1つのグループが編成され、5つの机に分かれて、所属学部・学科の枠を超えて教員と学生によるグループ作業のもと、弘前大学21世紀教育科目テーマを一つ設定し、その科目のシラバスを完成させました。グループ作業は、授業目的の設定、学習方略と評価方法の3ステップで展開し、ステップごとの成果をパワーポイントを使用して全体発表を行い、質疑応答により参加者から評価を受けるという形式でした。具体的な内容は、「国際社会を考える

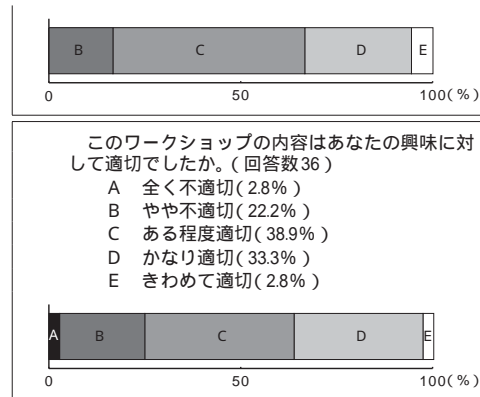
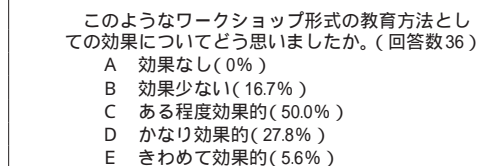
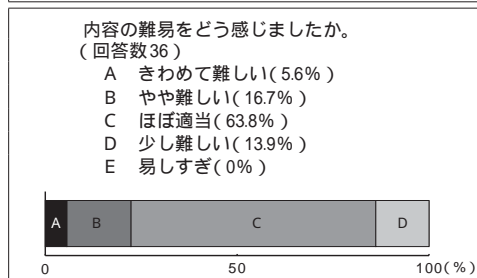
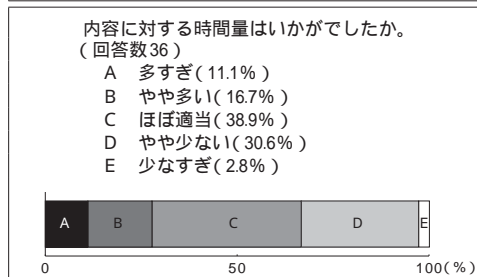
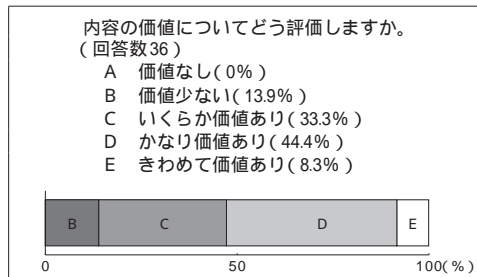
目からウロコ!?の国際理解」「健康と生活習慣 健康維持につながる予防法」「国際社会を考える ワールドカップ対戦国を中心に」などの科目テーマが設定され、授業目的を設定し、授業の展開内容から成績評価まで一つのシラバスを完成させました。発表ごとに評価を受けて修正するという進行はグループ間の刺激となり、また学生と教員との共同作業により相互交流の良い機会となりました。

作業にあたっては、PC機器、プリンターや大型ディスプレイが大学から持ち込まれ、グループごと

に設置され討議環境が整備されており、視覚的にも参加者全体の共通理解が深まりました。

今後のワークショップの改善に向けた資料とするために、昨年度と同様に「北海道大学 F D ワークショップ」で使用されている項目を基にしたアンケートを実施しました。内容は、8つの設問と3種類の自由記述からなる無記名式質問紙調査で、終了後に参加者を対象として実施しました。学生10名を含めた参加者全員36名からの回答を集計した結果が下記のグラフです。

設問1 今回のワークショップを全体的に評価してください。



ほとんどの参加者が内容に価値があると評価していました(設問1-1)。また、7割の参加者が興味に対して適切な内容であったと回答していました(設問1-5)。ワークショップ形式の教育効果に対しても大方の者が効果的であると判断しています(設問1-4)。内容に対する時間量(設問1-2)や内容の難易度(設問1-3)に対しても、大半の者が適当であったと回答していました。以上の結果から、今回のワークショップの企画・運営は概ね妥当であったと推定できます。

設問2 今回のワークショップ全体にわたりとても良かったと思われる点(自由記述)

38件の記述がありました。アンケートは無記名式であったため、回答者が教員によるものか学生によるものかは不明ですが、最も多かった記述内容は「バラバラの領域の人々が集まるため多面的な意見が得られた」、「他学部・教員・学生とグループワークをすることで認識を深めることができた」や「教員は学生がどのように考えているか、また逆に学生は教員がどのように考えているかというのを、話し合いを通じてある程度理解できたのではないかと思います」というような「他学部・学科の教員や学生との交流」(18件)でした。次に多かった記述は「大学教育として日頃おろそかになりがちの部分に目を向ける良い機会となった」、「シラバス構築のプロセスを学ぶことができたのは満足」や「学生にいかに授業をアピールするかわかった点」など「自分の授業の見直しや新たな知見」(11件)についてでした。また、「教員と学生が一緒に作業できたこと」や「学生が参加することにより、議論が盛り上がった」など学生参加の形式(9件)に関する内容でした。

設問3 今回のワークショップ全体にわたり良くなかったと思われる点(改善すべき点)(自由記述)

37件の記述がありました。「架空のシラバスを作るという設定である時点で、取り組み方がよく分か

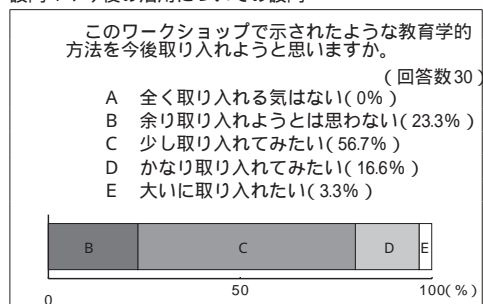
らなかった。各作業の前のレクチャーもそのあとの作業との関係もよく分からないし、配付資料のどこを見ればいいのかもよく分からない。」「せっかく他学部の教員や学生と一緒にのにレクチャーや作業ばかりで自由に話す時間がなかった」や「全体的として詰め込みすぎ」など展開（12件）についての記述が最も多くありました。また、「シラバスを作るそれぞれの項目の制限時間が短かったと思う」や「グループ討論の時間を充分にとってほしかった」など討議時間の短さ（9件）についての要望が多くありました。講義内容についての記述は8件で、「初めて聞く言葉が多くてよく分からなかった」や「初めての参加で分からない言葉が多かった。特にカタカナ用語の定義をしてほしい」など講義前に用語を共通理解できるようにしてほしいという指摘がありました。これらの指摘については、展開についてのガイダンスを十分に行うことや用語が理解しやすいような資料作成など何らかの工夫が必要であり、今後の改善点です。

設問2（良かった点）において、学生の参加意義を評価する意見が多くありましたが、「教員に対して学生の割合が少ない。さすがにこの人数では少数派の意見しか出ないと思う」や「教員の方が親しく話しかけてくれるとはいえ、やはり少々圧迫感がある」など学生への配慮不足（3件）を指摘する内容もありました。この点については、何らかの配慮が必要であるといえるでしょう。

また、「現実にはこのような方式で授業を行うことは不可能だと思う」や「21世紀の授業を考えると、実現不可能な内容になりがちである。例えば指定図書指定して、90分読むとしても100人超の授業では図書を読むことは不可能。1・2冊なら教科書にできるが毎回となると暴力的」などのように実現は無理という意見もありました（3件）。

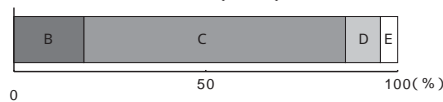
その他にはマイクやパワーポイント等機械類の充実に求める記述（2件）もありましたので、これは反省点です。

#### 設問4．今後の活用についての設問



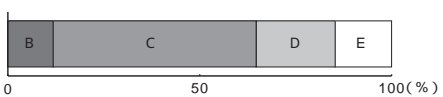
において「少し取り入れてみたい」から右3つのどれかに つけた方は、現時点であなたの教育現場で実現の見通しは？（回答数22）

- | 回答         | 割合    |
|------------|-------|
| A 極めて難しい   | 0%    |
| B かなり難しい   | 18.2% |
| C ある部分では可能 | 68.2% |
| D かなり可能    | 9.1%  |
| E 全面的に可能   | 4.5%  |



#### 設問5．今後ともこういうワークショップを持つことに対して（回答数34）

- | 回答           | 割合    |
|--------------|-------|
| A 反対         | 0%    |
| B 特に持たなくても良い | 11.8% |
| C 持っても良い     | 52.9% |
| D 持つ方が良い     | 20.6% |
| E 是非持つべきである  | 14.7% |



参加者の約8割が、今回学んだ教育学的方法を取り入れてみたいと考えており、現時点での可能性についてはある部分では可能性があると回答していました。一方で、2割はあまり取り入れようとは思わず、実現性についてもかなり難しいと回答していました。

また、今回のようなワークショップを今後も開催することに対しては、9割が肯定的な考えを持っていることが示唆されました。

#### 設問6．このワークショップの成果に関連して、今後1年の間に実施したいと考えていることを箇条書きにしてください。（自由記述）

23件の記述がありました。記述内容の多い順では、「具体的な評価基準の提示」「評価方法を学生に事前に十分説明する」などの評価方法の見直しや「グループディスカッションの導入」「講義内における学生との対応」など授業方法の見直し、それぞれ7件でした。その他には、「担当講義（少人数の専門科目）においてラーニング・ポートフォリオを利用してみたい」や「ゼミに反映は可能かと思われる」などラーニング・ポートフォリオの導入（5件）、「シラバスを重視して作成する」や「実習シラバス作成への応用」などシラバスの見直しや導入（4件）についてでした。

以上の内容から、ほとんどの参加者がこのワークショップでの経験を今後に活かしたいと述べていました。